第49回寝屋川市障害者計画等推進委員会　要旨

日　　時　令和３年３月16日　13:00～14:30
場　　所　市立保健福祉センター　５階会議室１・２
出席委員　上田委員　牛田委員　大西委員　岸谷委員　北野委員長　朽見委員　笹川委員
　　辻岡委員　栃木委員　冨田委員　中島委員　馬場委員　濱吉委員　久澤委員
　　村井委員　森下委員　山下副委員長（名簿順）
欠席委員　伊藤委員　奥村委員（名簿順）

手話通訳者の紹介

１　開会あいさつ（北野委員長）
今回は本年度の最終回である。次期計画はほぼ完成版としてできあがっており、本日の議論を反映して大きく修正することはできないが、全員に一言ずつ「思い」をお話しいただきたいと思うので、よろしくお願いする。

会議成立の報告
傍聴人の報告
資料の確認（次第、委員名簿を当日配付）

２　案件審議
(1)　寝屋川市障害福祉計画（第６期計画）・寝屋川市障害児福祉計画（第２期計画）（案）について
（北野委員長）
計画案とパブリックコメントの結果の説明を、一括してお願いする。
（事務局　資料に基づき説明）
［補足事項］
・本日も前回と同様に、新型コロナウイルス感染防止をふまえ会議時間を14時30分までとしており、資料説明も必要最小限とさせていただく。
・パブリックコメントでのご意見に対し、市の考え方を述べて原案通りとするもののほか、ご意見をふまえて誤字や表記等の修正、用語解説や資料の記載を行った。
・あわせて、大阪府との法定協議において文言修正を行っている。
（北野委員長）
それでは、大西委員から順に、一言ずつご意見をいただきたい。
（大西委員）
いちばん気になっていた親亡き後の対応について何回かの委員会で意見を述べたが、協議する場を設置して推進することなどを修正してもらった。関係部局と慎重に協議し、１日も早く設置することを望んでいる。
障害者支援の多様な人材の確保は事業者としてもいちばんの難題で、知恵を絞っているが、各事業所とも人材が集まりにくく、新年度を控えて募集しても申し込みがないことに頭を痛めており、行政の施策の力も得たい。
（北野委員長）
高齢障害者や8050問題も含めて検討する場を設けると書かれているので、頑張ってほしい。
（冨田委員）
細かな部分は他の委員に言っていただけると思うので、計画と日々関わっているなかで気に

なっている大きなことを２点述べたい。
　国がすすめる地域共生社会に関して、地域のなかでトータルに対応する重層的支援体制整備事業が打ち出されたが、計画策定のなかでは議論されず、記載も薄いと思う。同時期に策定される地域福祉計画や高齢者保健福祉計画でも積極的な展開が見られず、中核市になって市が担わないといけない部分が増えていくなかで、今後どのようにすすめるのか。日常の相談業務のなかでは分野を超えて対応しなければならないことが多く、自立支援協議会のひきこもり支援サブワーキングで地域包括支援センターに8050に類するケースの調査をすると、かなりの数があがってきた。親と子に障害があるケースも多く、民間はフレキシブルに対応しているが、行政のしくみとしてどうするかを懸念している。
　また、中核市になって市の姿勢が変わり、行政主体ですすめるなかで、民間や市民、当事者の声が届きにくくなったと、この１～２年ですごく感じている。
（北野委員長）
　大事なことなので考えてほしい。
（牛田委員）
　資料は音声データで聴いたり、ガイドヘルパーさんに読んでもらったが、立派なことが書かれており、すべてできたらよいと思う。「支援」や「協力」などの言葉が多く出ているが、コロナウイルス感染症が広がる以前に、団体でバスを借りて社会参加として行っていた活動について、中核市になってバスを利用できる回数が減らされている。家から出られない人を連れ出す活動が切られていると感じるので、元に回数に戻してほしいと望んでいる。
（北野委員長）
　次期計画では図も多用されており、視覚障害の方には理解していただくのが大変だったかもしれない。その説明も支援者の方から聴いてほしいと思う。
（濱吉委員）
　社会福祉協議会も地域のみなさんといっしょに地域福祉活動計画を策定しており、この計画を含む市のさまざまな計画と両輪となって動いていくよう、しっかり取り組みたい。特に地域共生社会づくりでは、冨田委員も言われたように、分野を超えて手を携えて活動できる取り組みをつくっていかないといけないと思っており、この計画を読み込んで具体的な活動づくりをしていく必要がある。防災に関する取り組みについても、以前に障害の団体の方といっしょに「マイ防災プラン」づくりの活動を行ったが、次の一歩につながっておらず、地域の方とつながる場もつくれていないことが課題となっているので、関係部局とも連携してしっかり取り組んでいきたいと考えている。
（北野委員長）
　防災を含め、自立支援協議会とも連携してすすめてほしいと思う。
（森下委員）
　重点的に取り組む事項なども丁寧に書かれているが、そのひとつである人材の確保は、大西委員も言われたようにどの事業者も困っており、市が行っているガイドヘルパー養成研修などを活用して資格を取得し、市内で働いてもらえるようなしくみに変えていけるとよい。また、制度の狭間に対応していくよう、行動援護と移動支援の併給などの実現に向けて市と話しあいを続けていきたいと思っている。
（北野委員長）
　人材育成はどこの委員会でも大きな問題として出されており、若い人に入ってもらえるよう、国も含めて考えていけるとよいと思う。
（久澤委員）
　権利のことなどについて意見を言わせてもらったが、今後のお願いも含めて３点発言したい。
　障害者雇用については数値目標も設定されているが、これを早く超えていくという構えが必要である。例えば、一般就労者数の目標は112人だが、この３月から民間の法定雇用率が上が

っていることもふまえて取り組むようお願いしたい。

就労継続支援Ｂ型の工賃も、寝屋川市は全国でも最低レベルの大阪府のなかでも低く、目標を実現するうえでの公的支援として市の仕事を出す事業をもっと展開する取り組みも必要であり、具体的なところを積極的に示してほしいと思う。

親亡き後の問題では、私の事業所にも70歳代後半の人が通所しており、生活の場としてグループホームだけでは間にあわない。そうしたなかで体系的な対策を研究してもらえば、私たちも参加して対応できると思う。

（北野委員長）

親亡き後の問題については、残された障害者が持ち家を活用して生活する方法がないかと考えている。海外では在宅に入って支援している事例もたくさんあり、日本でも政策として考える時期にきていると思っており、そうしたことも含めて議論したい。

（辻岡委員）

民生委員は、福祉委員の方とも協力して、特にひとり暮らし高齢者の見守りなどの活動を行っているが、コロナウイルス感染症の影響で思うように活動できていない。そのなかで、コロナウイルスに感染した人が差別されることが報道されて気になっているが、障害のある方も同じような目で見られているのではないかと思う。計画に書かれているように、権利をまもり差別や虐待を防止するよう、啓発や学習できる機会をもっと増やして充実してほしいと思う。

（北野委員長）

私の兄弟もマスクが苦手でじろじろ見られるので外出がしにくく、籠もってしまって体重も増えて、病気になることも心配している。コロナウイルス感染症が広がるなかで障害のある人が生きづらい部分を、地域でどのように見守り、サポートできるかを検討していただければと思う。

（笹川委員）

先日も和歌山や東北で地震が起きたが、災害時は障害者は情報が足りず、弱い立場になる。計画にも記載されているが、足りない面もあると感じるので、安心して生活できるものを盛り込んでほしい。特に、以前から何度も言っているように、障害者の防災マニュアルがすすんでいない。他県ではつくっているところもあるので、寝屋川市も頑張ってほしい。

差別解消についても書かれてはいるが、法律ができてから寝屋川市で差別があったのかなどの情報や差別解消地域協議会のメンバーも載っていないので教えてほしい。また、３年前に手話言語条例が制定されたが、市民や市職員のなかで広がっておらず、人権文化課で手話通訳を付けるようにお願いしても「意味がわからない」と言われたことは残念である。啓発やＰＲがもっと必要だと思う。

計画案はすばらしいが、誰に対するものなのかが問題である。障害で読めなかったり意味がわからない人もいるので、読んで理解できるよう、概要をまとめてルビ付きのわかりやすいものをつくってほしい。障害者に丁寧に説明し、理解を広めていかなければならないと思う。

寝屋川市は中核市になったが、どう変わったのかがよくわからない。みなさんも同じだと思うので、丁寧に説明してほしかった。私が調べてわかったのは、手話通訳者の養成講座は以前は府に委託して実施していたのが、市が独自ですることになったということだが、まだ開催されていないのですすめてほしい。他に変わったことも説明してほしい。

（北野委員長）

大事な点を指摘された。差別解消地域協議会の記述については私もそう思うので、次回に向けて考えてほしいと思う。

（栃木委員）

多様な社会参加の場づくりと支援についても方向性が書かれているが、３か年計画としてのスケジュール感がわからない。「推進」という言葉が多用されているが、短期と長期に分けて、いつ、どこで、誰がするのかの一覧表は、これからつくるのかもしれないが、障害のある人も

含め市民にわかりやすく発信してほしい。
（北野委員長）
　市民にわかるかたちでの説明は大きなテーマであり、ぜひ検討してほしい。
（馬場委員）
　私も8050問題が目の前に迫ってきており、現在、子どもはグループホームで生活しているが、医療的なケアのできない部分を家に戻って対応していることが将来はできなくなるなど、終の住処ではないと思っている。しかし、入所施設は何年も待機があり、心配である。
　法人後見のことも書かれているが、寝屋川市では具体的にどのような方向で考えるのか。大阪市は以前から市民後見をすすめているが、寝屋川市は案があるのか。
　親亡き後の問題は、親が亡くなってからだけではなく、親が介護を受けるようになる場合もあり、特に、コロナウイルス感染症が広がってからは不安が大きい。医療的ケア児への対応にもいろいろな課題があり、障害児施設の年齢超過の人の行き場がないことも気になる。
（北野委員長）
　午前中に他市の自立支援協議会があり、親が感染して濃厚接触者になった子どもが入院を拒否されたケースの支援が議論になったが、そうしたことについて、府とも協議して早めに検討してほしいと思う。成年後見については利用促進法ができ、次の計画では利用促進計画との関係についても議論しなければならない。
（岸谷委員）
　長い闘病生活をおくっており、活字とご無沙汰していたので資料が見づらいが、そうした経験のなかで、グループホームや施設で生活している子どもは幸せなのかと感じている。親に甘えないように外に出したが、素直に受け止められずに職員を困らせたりすると聞くと不安である。これは制度が充実すれば解決できることではなく、本人の状況に応じた対応ができる人材が必要だが、そこまでできない人も多いと聞く。寝屋川市は頑張っていると思うが、コロナウイルス感染症で外出できないなかで、抑えつけられても従うしかない人がいる状況を考えると、質的な部分はまだ課題がある。親が弱くなると、子どもを思う心は強くなる。障害があってもあたりまえのことができる世の中になれば安心できると思うので、この委員会を大事にしてみなさんの意見を集約し、市から府、国という流れで頑張ってほしいと願っている。
（北野委員長）
　20歳を超えた障害者をどう支援していくかという課題である。親と暮らしていても自立した社会人として接し、親が元気なあいだから地域で暮らすしくみを展開することで自立的な意識ができ、グループホームでそのまま暮らしている国もある。わが国が制度、政策としてどこまで考えていくかが大きなテーマだが、そのためのヒントをいただいた。
（村井委員）
　この委員会に永年参加させてもらい、寝屋川市の難病患者に対する支援は府内でも一二を争うと自負して感謝している。患者なので何もできないとは考えておらず、できることは努力しようと、社会福祉協議会からいただいている歳末助け合い募金の支援を使って、今年は難病患者がリモートで集まる試みを企画し、２月28日の世界難治性疾患の日に府内のいろいろなところから接続して、情報や意見の交換を行った。できることはするが、足りない部分は今後もご支援をいただきたいと思う。難病は医療と密接な関係があり、医療制度は国、福祉サービスは市だが、関係機関のみなさんと連携して、患者本人のプラスになる制度にしていくように努力したい。
（北野委員長）
　精神障害と難病は、どの市町村もとこまで関与するかが不明確なまま計画づくりがすすんでいるが、中核市なので、市としてどのように関与していくかを含めて議論ができればと思う。
（中島委員）
　障害者就労が増えてありがたいが、国と府の目線に違いがあると感じる。障害によってでき

る仕事とできない仕事があったり、職場に障害者一人で話もできないので私も職場を二度変わったが、賃金の決め方などにも疑問がある。

障害者団体では防災の勉強はするが、交通安全と防犯の取り組みはしたことがないので、もっと市の方ですすめてほしいと思う。

（北野委員長）

ハローワークは国、労働局関係は府なので、労働関係で差別的なことがあっても市では対応しにくく、一般就労で関与できることが限られているのはご指摘のとおりである。交通安全や防犯についてもいっしょに取り組んでいきたいと思う。

（朽見委員）

馬場委員、岸谷委員も言われたように、親の立場ではいくつになっても子どもは子どもで、先行きが心配である。家族や本人の個人の責任と言われるところもあるが、成人した子どもがどういう暮らしをしていくかが課題であり、暮らしの場として入所施設を希望する人が多いのはなぜかということや、国は地域移行と言うが、それがあわない人もいるなかでどういう暮らしの場が必要なのかを、行政が分析してほしい。そこがクリアにならないと、親の気持ちとしてグループホームへの移行は難しいと思う。「自分が元気がうちは家で、倒れたらなんとかしてほしい」と考えたり、「重度なのでグループホームに行けない」と思う親が多いが、私はそんなこともないと思う。若いうちにグループホームに入って自立の道を選ぶと、本人にとっても楽なのではないかと思うが、チャンスが少ないことが問題である。その人にとっていちばん良い暮らしの場を考えられるように提案することが必要であり、自宅でのひとり暮らしなども含めて考えていかないといけないと思う。

防災について、コロナウイルス感染症の対策として自宅待機や知りあいの家に避難するなどの方向が国からも示されつつあり、安否確認をどうするかが大きな問題になってくると思う。以前に災害時の障害者支援バンダナを吊すよう提案したことが計画も記載されており、考えていかなければならないと課題だと感じた。

（北野委員長）

入居施設の待機者が多いが、ニーズや状態をきちんと分析すべきというのはご指摘のとおりであり、成人した障害者は家族ではなく社会がきちんとサポートしていく文化や地域で暮らせるしくみを、つくっていくべき時期にきている。防災も含めて大事な問題なので、今後の課題として検討していきたいと思う。

（上田委員）

１年前は、コロナウイルス感染症に関して歯科は危険だと言われたが、クラスター化した事例は一切ない。あかつき・ひばり園の歯科診療所や保健福祉センターの障害者歯科診療は感染防止の対策に時間がかかって休診した時期もあったが、市の協力のもとで対策をすすめて取り組んでいるので、必要な方は事務局に連絡してほしい。

私はこの委員会に８年ほど参加させてもらっており、福祉計画はブラッシュアップされて読みやすくなったと思う。計画にもＰＤＣＩと書かれており、策定で終わるのではなく、実施し、チャックして改善していくことまでが、ひとつの計画になると思う。行政には異動があるが、この委員会も思いを引き継いで、計画がしっかり実施されることを願っている。

３月市議会で市長が令和３年度の市政運営方針を述べられたが、障害者に対する思いや方針が見当たらなかったことが非常に残念である。職員のみなさんに委員の思いを市長に届けてほしい。市長に思いが届かなければ行政は動かないと思う。個人的には、中核市になって三師会と行政の距離感が以前より広がったと感じているが、職員のみなさんは代わらないので、距離を縮めることはできると思う。リーダーシップを取る市長に熱く伝える行動を起こしてほしい。

（北野委員長）

歯科の問題をもつ障害者が多いなかで力強いエールだったので、しっかり支援していただきたいと思う。ＰＤＣＩサイクルもそのとおりである。他市の状況をみても、市長が障害者問題

に関心をもってくれると前向きに動くこともあるので、トライしてほしいと思う。

３　閉会あいさつ（山下副委員長）

本日も参加させてもらい感謝する。私はこの計画の策定に関わったのは初めてで、みなさんがしっかり意見を言って計画が立てられたのを見て勉強になった。仕事のなかで障害のある人にも関わり、どのように対応すればよいかの答えが出ないことも多いが、話をしていくなかでつくっていかなければいけないことも感じた。

今の時期はコロナウイルス感染症のことは避けて通れず、医療として健常者にもアプローチが難しいが、障害のある方はなおさらだと思う。私の病院でもかぜを引いた人を診るときは時間を変えたり待機してもらう必要があり、苦しいと思う。しかし、寝屋川市はＰＣＲ外来の立ち上げも早く、個人の開業医も診やすくなっている。ＰＣＲ外来では保健所に来れない人の検体を取りに行くなどの対応も整えてもらっている。新型コロナウイルスはわからないことが多く、ワクチンの接種などもスムーズな状態ではないが、国からの指示で動かないといけないなかでしっかりやっていると感じているので、市長などの上の人に、市民や職員などの思いを汲み取って動いてもらえればと思う。

（事務局）

現在の委員の任期は令和３年７月31日までであり、次の任期に向けて委員の推薦のお願いや公募を行うので、よろしくお願いする。なお、来年度の委員会は１回を予定している。

本日は本年度最後の委員会なので、福祉部長よりごあいさつを申し上げる。

（南福祉部長）

本日はお忙しいなかご出席いただき感謝する。平素より本市の障害福祉行政に多大なご支援ご協力を賜り、厚くお礼申し上げる。本年度は障害福祉計画・障害児福祉計画の策定年度であり、委員のみなさまには計画案に関する審議など、活発な議論をしていただいた。さまざまな角度からたいへん多くのご意見を頂戴し、感謝申し上げる。おかげをもって計画案を作成することができた。心からお礼を申し上げる。

今後は本計画に基づき障害福祉施策を推進してまいりたいと考えている。今後ともご支援ご協力を賜るようお願いし、お礼のあいさつとさせていただく。

（事務局）

以上をもって第49回委員会を終了する。

（閉会）